

11-2 二子塚遺跡出土土器の時期

二子塚遺跡出土の弥生時代の土器は、甕棺が中期後葉（～後期初頭）に属する以外は、ほぼ後期の範疇に収まるものである。その変遷については前節「11-1 二子塚遺跡出土弥生土器の分類と編年」で示した。

以下では、その開始と終焉の時期を詳細に検討し、二子塚遺跡における集落が営まれた時期を示す。

1 開始の時期

二子塚遺跡の弥生集落は、日用土器が示す時期をもって成立すると考える。日用土器には甕棺と併行する可能性のある土器は存在せず、弥生後期土器が主体である。

熊本県域における弥生時代後期土器の変遷に関して、基本的な視点を示した高木正文氏は、鹿本郡鹿本町津袋大塚遺跡出土土器をⅠ期、Ⅱ期の前後2時期に分けた〔高木 1979〕。弥生時代後期を仮に初頭、前葉、中葉、後葉、終末（庄内式併行期）の五小期に分けるとすれば、津袋大塚遺跡出土土器のⅠ期（前半期：図 298 上段）が前葉、Ⅱ期（後半期：図 298 下段）が中葉に相当すると考える。因みに、後期初頭には、熊本市下南部遺跡第 12 号住居址から出土した土器群が相当する〔大城・廣瀬 1979〕。この土器群は、鋤先口縁のなごりで内面に強い稜線をもつ口縁を有し低脚の台付甕、刻目突帯を有する中型、小型の壺等から構成される。

二子塚遺跡の土器には後期初頭の段階及び津袋Ⅰ期に相当する段階、すなわち後期前葉の段階はない。このことから、二子塚遺跡の弥生集落は後期中葉に出現するものとする。

2 終焉の時期

それでは、二子塚遺跡の弥生集落の終焉はどのような時期に相当するのであろうか。

熊本県域において弥生文化の終末期を土器によって論ずる際には、脚台部が高脚化し、タタキ痕が顕著な台付甕の有無、無脚の長胴甕の有無、そして複合口縁壺の変遷〔武末 1982〕等が指標とされてきた。また、佐藤伸二氏や松本健郎氏による古式土師器の研究も弥生文化の終焉を古墳時代資料の側から規定しようとするものであった〔佐藤 1970、松本 1974〕。検討する資料数を十分に得たうえで古式土師器を明快に論じた野田拓治氏は、上益城郡益城町古閑遺跡北地区溝出土土器を「古閑期（古閑式）」とし、古式土師器の最古段階に位置付けた（図 298 上段）〔野田 1982〕。この古閑期の土器群には台付甕はなく、タタキ痕を顕著に

残す長胴甕、球胴甕が特徴的であり、壺には肥後的な大型複合口縁壺が存在する。注目すべきは、口縁部に円形浮文をもち、扁球形の胴部に横位の磨きを施した加飾の複合口縁壺や、口縁が朝顔状に広く開く坏部を有し暗文状の磨きをもつ高坏が含まれることである。この2器種は、古閑期より前の中九州地域には系譜を追うことができないものであり、外来系土器と評価されている。

石橋新次氏は野田氏の検討を一步進め、古式土師器の細分と広域編年との対比を試みた〔石橋 1983〕。石橋氏は、菊池郡大津町西弥護免遺跡第 14 号住居址や阿蘇郡阿蘇町陣内遺跡の出土土器に基づいて、古閑期の前に一段階を設定した。この段階の甕は高脚化した台付甕と脚台をもたない長胴甕から成り、壺は口縁が細く伸びるか、あるいは内弯気味に収まる最終段階の肥後型複合口縁壺である〔武末 1982〕。石橋氏はこれらの土器から成る段階を古式土師器Ⅰa期、古閑式をⅠb期として庄内式併行期と捉え、玉名郡岱明町山下遺跡（Ⅱa期）や熊本市上ノ門遺跡（Ⅱb期：図 298 下段）からの出土土器群に代表される布留式古段階に先行する土器群として位置付けた。

熊本県域と同じく有明海に面する佐賀平野でも詳細な土器研究が行われている。蒲原宏行氏は佐賀平野の弥生土器と古式土師器の編年を試み、福岡県域の土器編年と対比し、全国的な編年網に位置付けた〔蒲原 1991〕。その中では古閑期の加飾壺や暗文高坏と類似する土器群から成る段階がタケ里期として設定され、庄内式併行期と捉えられている。このような観点からも古閑期を庄内式併行期とみなすことに異論はない。

二子塚遺跡の土器には、脚台のない長胴甕の段階や古閑期の段階に属する土器群はない。すなわち、二子塚遺跡の土器は、庄内式併行期より前代に属する土器群であり、高脚化した台付甕は庄内式併行期の直前段階を示している。

なお、高脚化した台付甕を残しつつ脚台のない長胴甕が出現する段階（石橋氏Ⅰa期）も、資料の増加と詳細な検討を深める機会を待ちたいが、現状では肯定しておきたい。ただし、石橋氏が提起したⅠa期が白

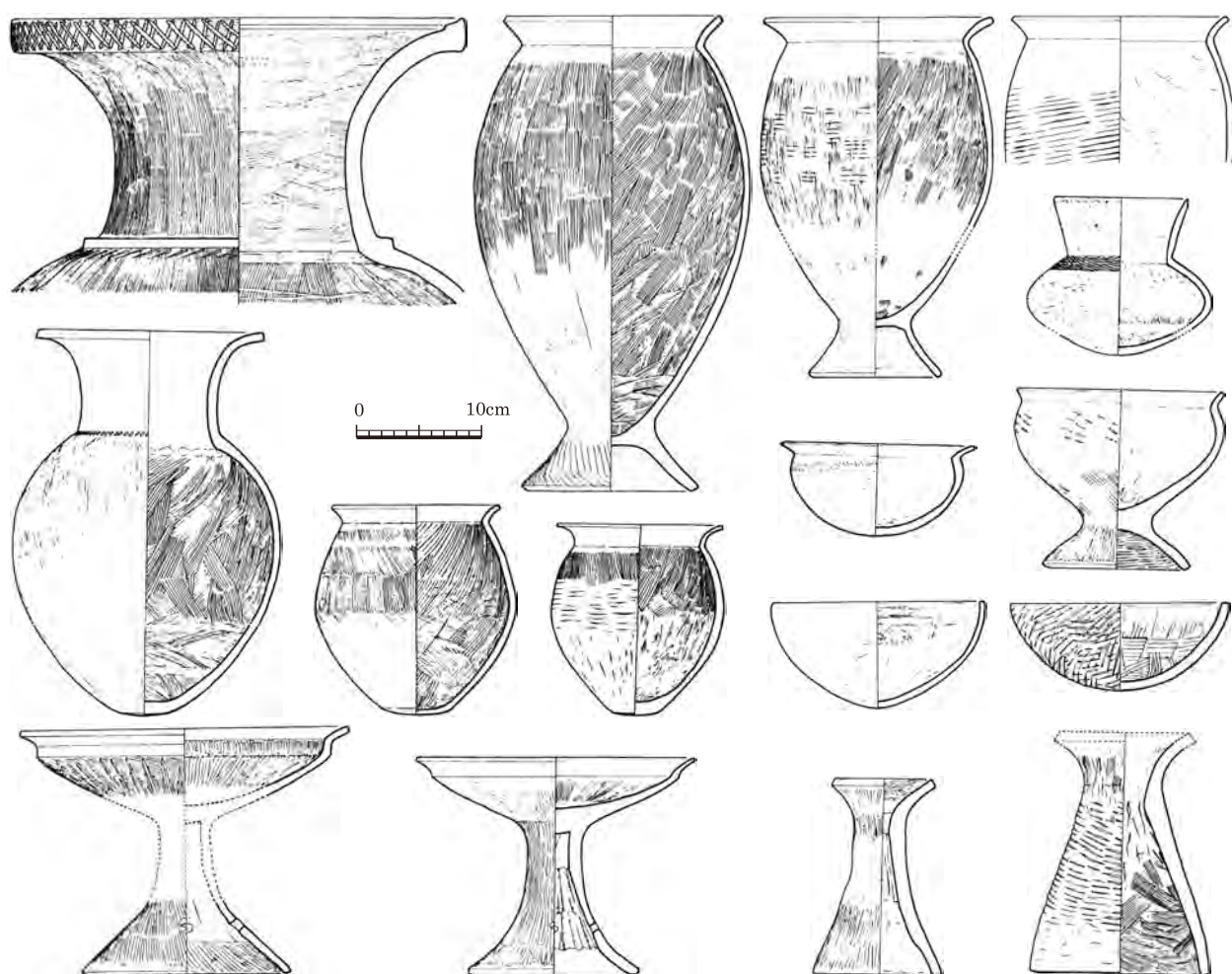
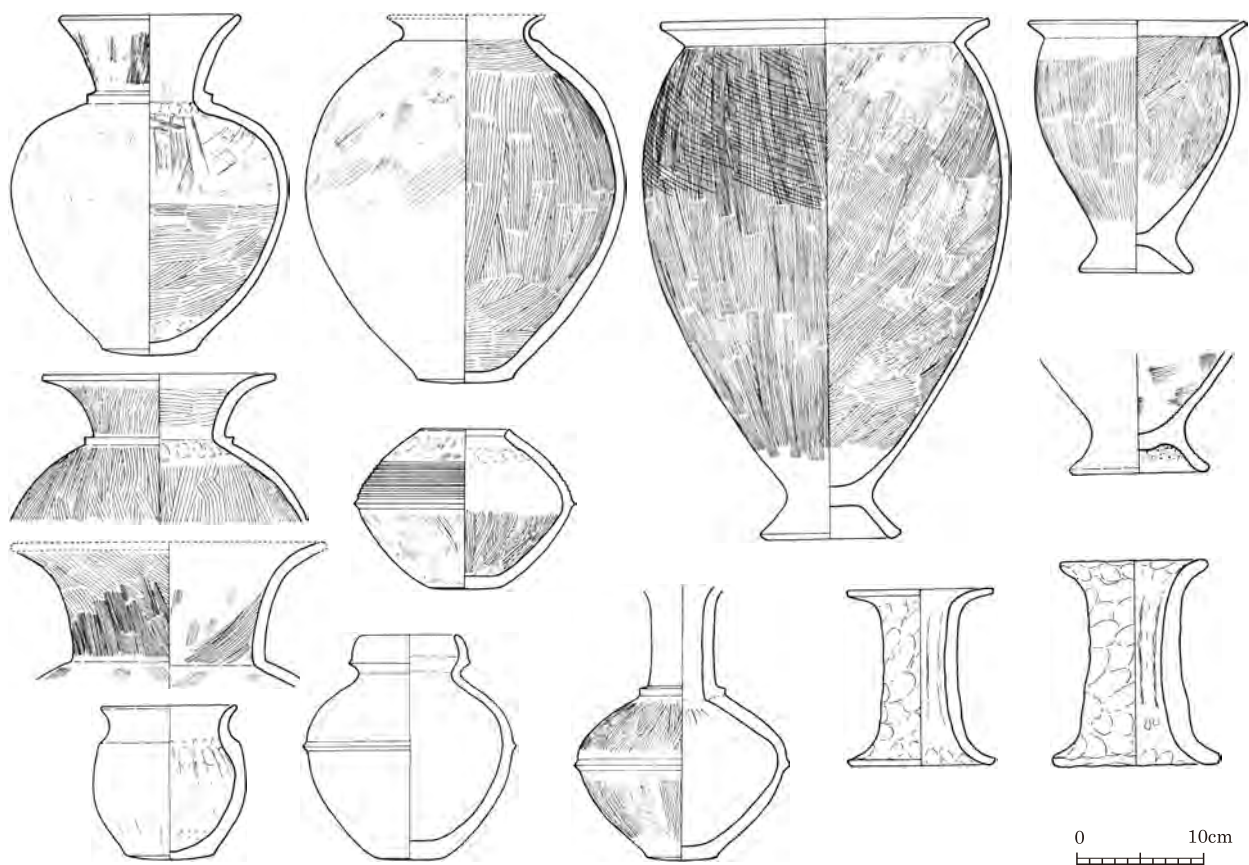


図 298 熊本地域の後期弥生土器 (高木 1979)

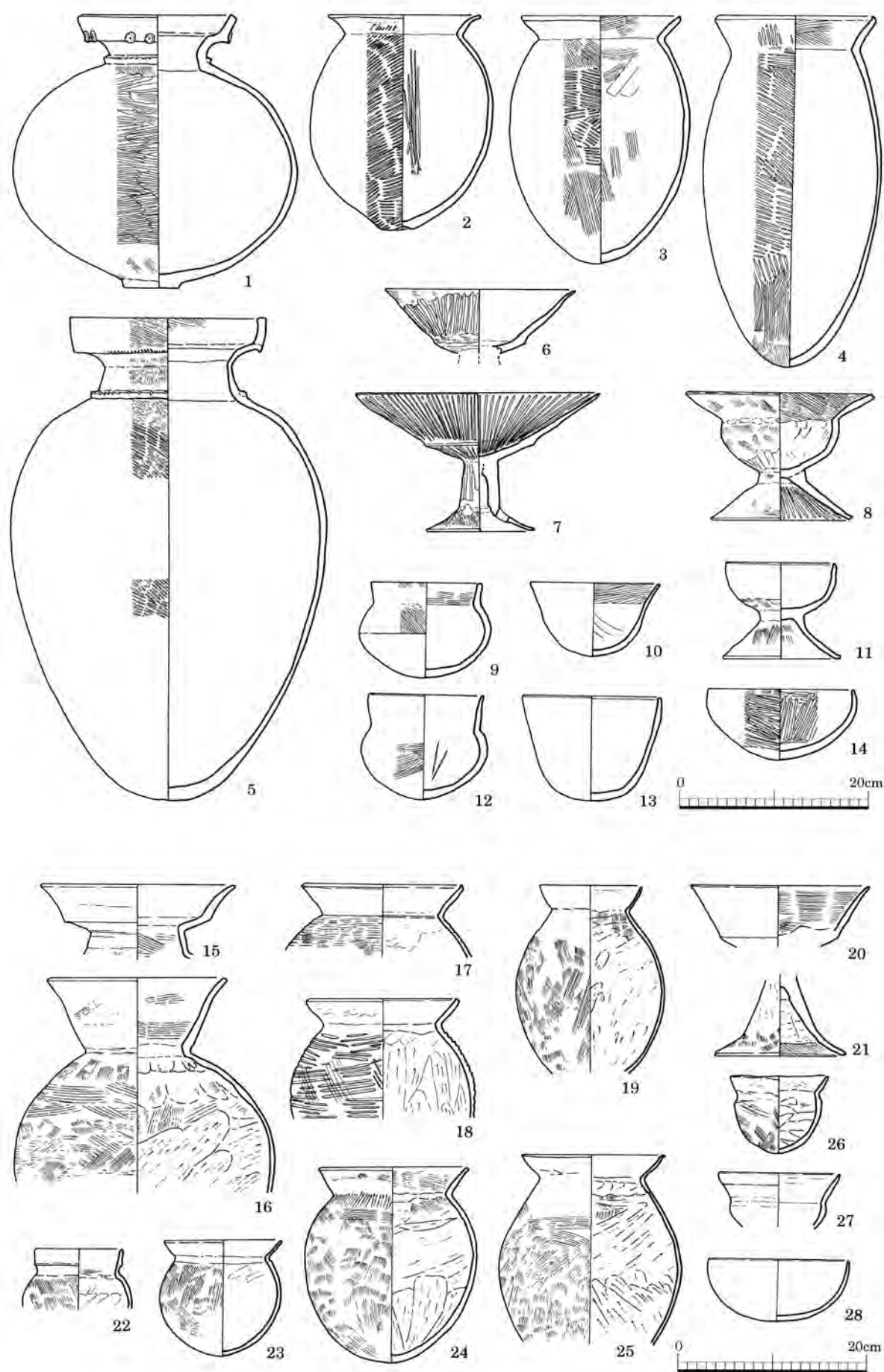


図 299 熊本地域の古式土師器 (野田 1982, 石橋 1983)

川流域の資料で設定してあるため、高脚化した台付甕と脚台のない長胴甕から成る段階が白川流域以外の地域でも認められるか否かは問題点として残る。つまり、高脚化した最終段階の台付甕のみでⅠa期が設定できる地域もあり得るのである。この点についての詳論は今後の課題としておきたい。

3 二子塚遺跡出土土器の時期

以上のように考えると、二子塚遺跡の弥生後期土器は後期中葉から後期終末の範囲で捉えられるものであり、集落はその間、出現し、展開を経て、終焉を迎えたのである。

〔引用文献〕

- 石橋新二 1983「中九州における古式土師器」『古文化談叢』12、九州古文化研究会
- 大城康雄・廣瀬正照 1979『下南部遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年 ―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』16、佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
- 佐藤伸二 1970「中部九州における前期古墳発生の一側面 ―とくに土師器の編年に関する再検討―」『熊本大学法文論叢』熊本大学法文学部
- 高木正文 1979「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』6、九州古文化研究会
- 武末純一 1982「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞二郎博士古稀記念古文化論集』森貞二郎博士古稀記念論文集刊行会
- 野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開 ―特に中部九州における編年試案―」『森貞二郎博士古稀記念古文化論集』森貞二郎博士古稀記念論文集刊行会
- 松本健郎 1974「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』60－3